令和２年度「こころの言の葉」コンクール作品集

私の大切なひとたちへ、
私の言葉で伝えたい

第18集

こころの言の葉

鹿児島市教育委員会　編

はじめに

鹿児島市教育委員会教育長　杉元　羊一

本年度の「こころの言の葉」作品集が出来上がりました。皆様にお届けできることを大変うれしく思います。これは、「鹿児島市の教育を考える市民会議」の提言を受け、平成十五年度から実施されているものです。これまで、「こころの言の葉」コンクール及び作品集には、各方面から大きな反響をいただいており、今回で十八回目を迎えました。

本事業には、面と向かっては恥ずかしくてなかなか言えないようなことを一枚のはがきに託し、中学生とその親の心の交流を図り、お互いの存在について考えを深め合うという趣旨があります。今年も数多くの「言の葉」が寄せられ、その数は一万五千四百三点。また、親の部の応募も九年連続千点を超え、「こころの言の葉」への関心の高さと、本事業の趣旨である、親と子の心の交流が図られていることをうかがうことができました。さらに、八月にはＦＭ鹿児島の生放送番組「朝ＣＡＦＥ」で令和元年度の入賞作品が朗読され、今年度もより多くの市民の皆様に親しまれる機会に恵まれたことを大変うれしく感じています。

この作品集には、中学生とその親が、お互いに向けて宛てた四十四編のメッセージが掲載されています。感謝の気持ちを素直に伝える言葉。不安やささやかな願いをそっとつぶやく言葉。自分の反抗期を受け止めながら不満と感謝の気持ちを打ち明ける言葉。我が子の成長した姿に一喜一憂しながら大きな心で受け止める言葉。いつの時代にも胸を打つこれらの言葉に加え、本年度は新型コロナウイルス感染症の収束に願いを込めた作品も多数見られました。一つ一つの言の葉が、読む者の心を揺さぶります。御家族皆様でこの作品集に触れ、親や子としての在り方について考える契機としていただければ幸いです。

最後に、素晴らしい「こころの言の葉」を寄せてくださった全ての皆様に心から感謝申し上げます。

令和三年一月

目次

「思いを伝える」言の葉
―子から親へ―

お弁当の色は母の色 …… 4
母への思い …… 5
母の貼り紙 …… 6
父と私 …… 7
ゴメン …… 8
父へ …… 9
僕の不登校を救ってくれた出来事 …… 10
夜勤中だったのにごめんね …… 11
私の小さなお母さん …… 12
不器用な母へ …… 13

「思いをつなげる」言の葉
―親から子へ―

いつもの朝 …… 15
「ねえ、お母さん知ってる？」 …… 16
祖母と息子 …… 17
愛おしい貴女へ …… 18
応援してるぞ！ …… 19
バイク …… 20
お母さん、無理。 …… 21
成長 …… 22
がんばってね。 …… 23
応援させてくれて　ありがとう …… 24

「思いを交える」言の葉
―子から親へ―

私より思春期なお父さん …… 26
がんばり屋さんの母 …… 26
母 …… 27
支えてくれるお母さんの手 …… 27
生意気なのは …… 28
あいさつ …… 28
私の母は超能力者 …… 29
父 …… 29
おやじギャグの絶えない父へ …… 30
母の作戦 …… 30
強い母 …… 31
母と二人 …… 31

「思いを重ねる」言の葉
―親から子へ―

あかぎれの薬 …… 33
息子へ …… 33
言葉の力 …… 34
家族の誇り …… 34
たまの送迎 …… 35
一緒に寝よっか …… 35
心の風鈴 …… 36
優しい雨音 …… 36
似た者どうし …… 37
親の心、子知らず …… 37
いるだけで、いいんだよ。 …… 38
頑張り屋さんのあなたへ …… 38

令和二年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧 …… 39
令和二年度「こころの言の葉」コンクール表彰式 …… 40
審査員講評 …… 41
編集後記 …… 42

「思いを伝える」言の葉

―子から親へ―

お弁当の色は母の色

蓋を開けばあふれだす色。今日もついにきた、この時間。唯一母の気持ちと静かに向き合える。それが赤い箱のお弁当。

仕事で疲れている時は冷凍パスタや冷凍唐揚げ。茶色っぽい感じで、私も少ししょんぼり。

何か良いことがあった時は、ミニトマトやふっくらな卵焼き。色鮮やかでまるでバラ園にいるかのよう。母の鼻歌が今にも聞こえてきそう。

「いただきます。」

よし、今日は何色のバラが見られるかな。そしてそっと蓋に手をかける。パカッ。目をつぶり、空気をたくさん吸い込むと同時に、母のいい匂いがする。

今日もありがとう、お母さん。大好きです。

母への思い

小さい頃から、
「一緒にしよう。」
って言うのが、お母さんの口癖だね。ぼくは、その言葉で成長してきた。
ぼくに、
「これをして。」
と、お願いしたことないね。だから一緒にして覚えたことは、山ほどある。
これからは、
「ぼくがしておいたよ。」
って言うと、お母さんは、寂しいかな。嬉しいかな。

母の貼り紙

私の母は、休日も時々仕事に行っている。休日は遅くまで寝ている私が、朝起きて食卓に向かうと、朝ご飯と冷蔵庫に貼り紙がある。

「冷蔵庫の中にヨーグルトがあります。昼はカレー。」

また、テストが近づくと、

「テスト一週間前　テレビは勉強が終わってから。」

と書かれた紙がテレビに貼られる。そんなふうに、家のあちこちに現れる母の貼り紙は、時々かわいいイラスト付きだ。そのイラストを見ると、なぜか心が温かくなる。

家族に色々な事を伝えるために貼り紙を使う母。私はそんな母のことが好きだし、母の貼り紙はなんだか安心する。

父と私

単身赴任で奄美大島に行った父。毎日仕事をがんばっている。コロナウイルスの感染防止のために、帰ることは自粛しなければならない。だから、私は父に四か月も会っていない。でも、よく電話で話したり、勉強を教えてもらったりしている。どうでもいいようなことも、父に話すとたくさん笑ってくれる。難しい問題も父なら簡単に解いて説明してくれる。

早くコロナウイルスが終息して家族四人でいろいろな所に行けることを楽しみにしている。父もきっとそう思っているだろう。その願いが叶う日がくるまで、たくさん電話を通して語り合いたい。

ゴメン

中学二年の終わりごろから母とけんかをすることが増えた気がする。三年生になってからもそれは変わらない。三年生になってからの母とのけんかの原因は勉強のことがほとんど。

最近、勉強のことでけんかをした。朝から僕(ぼく)はイライラして、「いってきます。」を言わなかった。学校から帰ってきて、父から、

「母さん、何かテンション低いぞ。」

そのとき、僕は謝(あやま)りたいと思ったけど、何か心の中の変な気持ちがじゃまをして言えなかった。こういうことを思春期って言うのか分からないけれど、前まで言えたことが言えなくなるのは何か悲しい。ゴメンと心の中でつぶやいた。

父へ

父は漁師だ。いつも仕事終わりは魚くさい。小学生のころはそのにおいが大嫌いだった。周りの友達のお父さんは魚くさくない。なんで僕の父だけ……。

その上、僕は魚があまり好きではない。あの生臭さが嫌いなのだ。

ある日、父が釣ってきた鯛を刺身にして持って帰ってきた。本当は食べたくなかったが一枚だけ食べてみろと父に言われたので、一枚だけ食べた。新鮮な鯛の油と食感が口の中に広がる。この新鮮な鯛を毎日食卓に届けているのか……と父に尊敬の念を抱いた。

僕は今でも魚は好きな方ではない。それに将来は漁師になりたいわけじゃない。でも、あのにおいをかぐと、父を誇らしく思う。

僕の不登校を救ってくれた出来事

今はコロナ生活で、自粛している日々が続いていますが、僕自身も自粛していた時期がありました。それは、『不登校』です。夏によく聞いたことがあるワードなのかもしれません。一度なってしまうと、なかなか治りませんが、それを救ってくれた救世主が僕の両親です。

初めは、病院に行き、精神を安定させる薬を貰っていましたが、不安がおさまらずにいました。ですが、親は学校に行かせようとせずに優しく僕に接してくれて、責めたことなんて一度もありませんでした。このような日々のおかげで、今では学校に行けるようになりました。本当に、ありがとうの一言だけでは足りないくらい感謝しています。いつもは、恥ずかしくて言えないけど、いつもありがとう。

夜勤中だったのにごめんね

私がクラスで、孤独を感じていた時、明日学校へ行きたくなくて夜眠れなかったから、夜勤中のお母さんに電話したんだ。だって、お父さんにはこんな気持ち話せないから。こんな涙見せられないから。お母さんは、「今、忙しいんだけど。」と言いながら、電話を切ろうとしなかったよね。私、話したいことの半分も言えなかったけど。夜中なのに電話からもれるほど大きなお母さんの声に、恥ずかしいけど安心したんだ。次の日、帰宅したら、お母さん少し涙目で待ってくれてたね。いつも短気で強いことばっかり言ってくるのに、私のことではすぐに泣いて必死になるよね。ちゃんと伝わってるよ。一緒に乗り越えてくれてありがとう。ありがとう。

私の小さなお母さん

私には母がいません。しかし大好きな姉がいます。唯一の姉です。二つ上の姉は長女であるからなのか、何でも私にしてくれます。勉強を教えてくれたり、料理をしてくれたりします。まるで「小さなお母さん」のようです。姉はいつも私に「大好きだよ。」と声をかけてくれます。でも私はその度、恥ずかしくなってしまいます。「私もだよ。」その一言が言えないのが、とても悔しいです。なので、この場で伝えたいのです。頭では分かっているのに声に出せない、この言葉を。心から、

「いつもありがとう。大好きだよ、お姉ちゃん。」

不器用な母へ

部員が一人になるって分かったとき、正直、部活を続けようか迷った。お母さんは、相談しても

「あんたが自分で決めることよ。」

って、何も言ってくれなかったよね。親なのに、こんなに困っているのに……と、とても悲しかった。でも、今なら分かるよ。あの時の言葉は、「私がどんな選択をしても応援するよ。」って意味だったんだよね。あの時一人になっても続ける決心をして良かった。一人になったからこそ、色々な人に支えられてること、お母さんが大きな存在だってことに気づけた。つらいことも笑顔で乗り切ってしまう明るいお母さん、これまで迷惑をかけてごめんなさい。そして、いつも支えてくれてありがとう。あなたはいつまでも私の理想です。

不器用なお母さんに似た娘より

「思いをつなげる」言の葉

―親から子へ―

いつもの朝

「ジリジリジリジリ・・・」

ある部屋の目覚まし時計のベルが、鳴っては止まりの繰り返し。

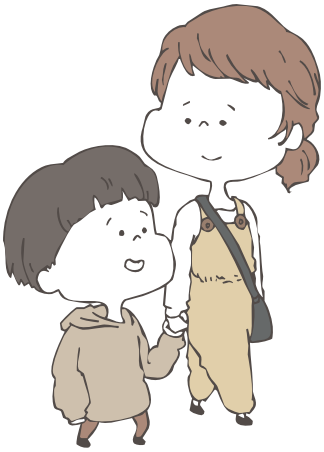
結局、周りのみんなが起こされる。目覚まし時計をセットした肝心の息子は起きる気があるのかないのか……。でも、この目覚まし時計の音がいつか聞けなくなる日が来ると思うととても寂しい。

このにぎやかな朝のひとときを、もうしばらく堪能しようと思う。

「ねえ、お母さん知ってる？」

幼稚園へ行く途中、自転車の後ろから
「ママ、軽くなった？」
の声。振り向くと脱力した息子。何をしているの？と聞くと
「プールでは力を抜くと浮かぶんだけどな……。」
とのこと。かわいくて、でもちょっとだけ感心しながら幼稚園へ向かったことを覚えているよ。

中学生になった今も
「ねえ、お母さん知ってる？」
といろんなことを教えてくれるけど、もう難しくて途中から「？？？」となる私に、わかるように一生懸命説明してくれる顔は、自転車の後ろにいた時と一緒だね。今も大好きな時間です。



祖母と息子

近頃、何度も同じことを聞いてくる祖母。また言ってる、さっきも言ったじゃない！と、少しイラつく私。けれどあなたは違う。同じことを聞かれても初めて聞かれたかのように優しく答える。

「いつもニコニコ笑っててかわいいねえ。」

という祖母。

「ばあちゃんに似たんだよ。」

と答える息子。何度も見てきたこのやりとりに、心がジーンとする。ありがとう息子！

あなたの笑顔にはパワーがある！

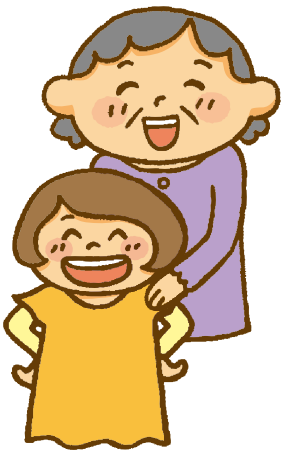
愛おしい貴女へ

私たち祖父母と暮らし始めて三年。

母親が突然旅立ったことで貴女の心の中では納得いかないこと、思い通りにならないこと、悲しみや不安が沢山のこと、理解してあげられないことが多すぎて、ばあちゃんも葛藤しています。だけど、これだけは自信をもって言えます。貴女が愛おしく大好きだってこと。

貴女の為なら辛くても頑張れるってこと。

一緒に居てくれてありがとう。



応援（おうえん）してるぞ！

「宿題したのか。」

「素振（すぶ）りしたのか。」

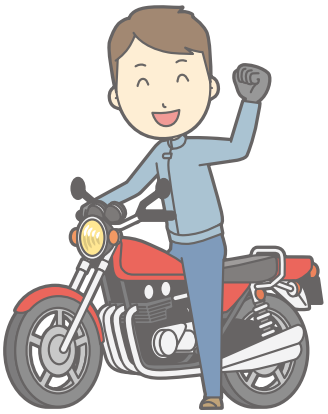
「『ありがとうございます。』『おはようございます。』と、お礼やあいさつができているか。」

いつも注意ばかり言ってるけれど、本当に言いたいことは、

「いつもがんばってるね。応援してるぞ。」

バイク

娘が幼稚園生だったころ、
「おむかえは、バイクできてね。」と言われ、
二人乗りではしゃぎながら帰っていたあの頃。
そんな娘も、もう中学生。
ここ最近、娘からの誘いで、また一緒にバイクでツーリングに出かけるようになった。
二人乗りでのツーリングは、とても懐かしく楽しさが蘇った。
ただ一つ違うところは、幼稚園生のころと比べると、バイクがズッシリと重く感じる。
娘も大きくなったんだなと、成長を感じる瞬間でもあった。
もっと大きくなったら、二台のバイクでツーリングに行きたいな。



お母さん、無理。

「『こころの言の葉』コンクールの募集が来てるけど、お母さんには無理だわ。」とぼやく私に、中三の娘が笑いながら「それって、お母さんが文を書くのが下手だからなのか、私に伝えたいことがないからなのかのどっちかだね。」と言った。そんなことを笑顔で言えるようになったのかと、娘の顔を見つめる。

思い出すのは、赤ちゃんの頃の花が咲いたような笑顔。それから小一の運動会で赤組が負けて大泣きした時の顔。卵ご飯を食べる時の幸せそうな顔。部活動で楽器を演奏する時の真剣な顔。いろんな顔を思い出して、大きくなったんだなあと思う。

――言っておくけどね。お母さんは、あなたのことならいくらだって語れるんだよ。ただ、それを三百五十字以内でまとめるのは無理だって話。そこ、正しく理解してね。

成長

あなたを抱(だ)っこで歩く時　小さいあなたを守らなければと思った
あなたを支えて歩く時　よちよち歩きでいつ倒(たお)れるかハラハラしていた
あなたに隠(かく)れて歩く時　一人で道に迷わず無事に家まで帰れるか心配していた
あなたの前を歩く時　口もきかずにケンカして背中で語っていたけれどどれだけ
伝わっていただろう
あなたの横を歩く時　姉妹(しまい)気分で楽しい買い物
あなたの後ろを歩く時　あっという間に大きくなったとうれしいようなさみしいような
私があなたに支えられて歩く時　あなたは何を思うだろう

がんばってね。

毎朝、登校するあなたが、私に向けてかけてくれる言葉。

「お母さんも、がんばってね。」

私も仕事で、息子と一緒に家を出る為、別れる際必ず言ってくれる。時間のない朝、バタバタしていても必ず……。

まっすぐに毎日を過ごす一日のスタート。自分を、ふるいたたせているのだと思います。

あと、何回、言ってくれるかな？すてきな言葉、毎日、ありがとうね。

応援させてくれて　ありがとう

毎日汗だくで帰宅し
それでも足りないと　走りに行った

試合の度に　感想を求め
大会に負けた帰りには
「ごめん　また　優勝旗見せられなかった。」
と　一言

チーム全員が　優勝の手応えを感じ
開催を願った大会は　中止となった
「ごめん、最後まで、優勝旗を見せられなくて。」
と　涙し続けて
「どんな時でも　支えてもらったのに……。」
お父さんは　楽しかったよ
これまで応援させてくれて　ありがとう

「思いを交える」言の葉

―子から親へ―

私より思春期なお父さん

仕事が忙しくて、あまり話せないお父さん。無口だと思えば、ふざけたり夢中になってサッカーを応援してたり。子供っぽいところもある。

中学生になると、お父さんが今までよりそっけない。こっそりお母さんとの会話を聞くと、「思春期だから、どう話せばいいか分からない。」らしい。

私はあまり意識してないのに。そっけなくなった理由が分かって、びっくりした気持ちと、少しうれしい気持ちだ。ちゃんと私のことを考えて接してくれるのはうれしいけど、私は思春期だからって考えたことないよ。小さいときのように遊んだりはできないかも知れないけれど、お互いに思春期を乗り切ろうね！もちろん仲良く。

がんばり屋さんの母

僕の母はとてもがんばり屋さんだ。毎日、朝から晩まで一生懸命がんばっている。仕事で夜遅く寝ているのに、朝起きたら、もうすでに家事をしている。いつ、寝ているのだろうと疑問に思うこともある。まさか、不眠不休。そんなわけない。人間は絶対、寝る。僕でも、毎日、夜の十二時や一時に寝てたら、身がもたない。

「なんで、そんなにがんばれるの。」

そう聞いてみた。すると、母から

「あなたたち三人がいるから。」

と優しい声で言われた。ちょっと照れる。

毎日、がんばっている母。僕も母のように、誰かの為にいっぱいがんばれる人間になろうと思う。

母

私と今暮らしている母は、私と八歳の頃に出会った母だ。私を産んでくれた母は病気で七歳の頃に亡くなった。周りからは、「かわいそう」とか「大変だね」とかよく言われた。さすがに、亡くなった時は悲しいし小さくてあまり理解ができていなかった。でも、今の母とも、本当の親子だと思っている。今日の朝だって怒られたし、成績表を見せるのだってめちゃくちゃ怖い。反抗だってするし、相談だってする。そこらへんにいる家族だと思う。だから、私は、大変なんかじゃないしかわいそうなんて思えない。逆に、すごく幸せだと思う。亡くなった母の分まで思い出つくって長生きしよう。

支えてくれるお母さんの手

優しさにあふれるお母さんの手。いつもその手が私を包んでくれました。

中学校最初の定期テスト。私は不安で泣いてしまったこともありました。そんな時にお母さんは、横で見守ってくれたり、手伝ったりしてくれました。本当にありがとう。そして、不安な私に「結果は今だけの努力じゃない。これまでずっと積み重ねてきた努力の成果だよ。」と声をかけてくれましたよね。私はこの言葉に勇気をもらいました。

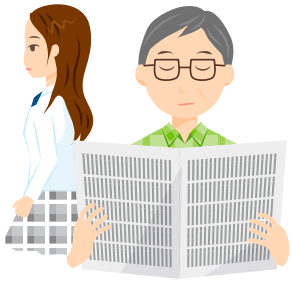
時には反抗してしまうこともありました。ごめんなさい。でも、お母さんはいつも私のことを思ってくれていました。仕事で疲れているのに私を支えてくれているお母さんの手。その手はとても温かくて、握っているだけで安心します。改めて、数え切れないくらいのありがとう。

生意気なのは

おとうさんは、私が反論すると、決まって、
「生意気なことを言うんじゃない。」
と言うね。
でも、私は生意気なんかじゃない。
わかってほしいだけなんだ。
私が思ったこと、感じたこと、考えたこと
おとうさんだからこそ
わかってほしい。
だから、
ほんの少しでもきいてくれると嬉(うれ)しいんだよ。

あいさつ

「おはよう。」父は私が起きると、すぐに言う。私はめんどうくさがり、素通(すどお)りする。そうすると父は「あいさつはしなさい。」と言う。これが毎日だ。朝は声を出したくないのにといつも思い話すが、それでも朝には「おはよう。」反抗(はんこう)期なのかなと自分で思う。その次も次も、またその次の日も父は「おはよう。」と言ってくる。ない日は少し物足りない気もするけれど、私は負けてたまるか。いつか自分から先に言ってやる。



私の母は超能力者（ちょうのうりょくしゃ）

「お母さん、何で分かったの？」

私の母はすごい。私の顔を見るとすぐに、母は、

「何かあった？」

良い事も悪い事もすぐにばれてしまう。母に気づかれないようにしている時ほど、母にはどうやら分かるらしい。

「あなたのことは聞かなくても見なくても、何でも分かるよ。」

と言われる。やっぱり超能力者（ちょうのうりょくしゃ）だ。そう言われると良いことは早口になり、どんどん話してしまう。逆に悪いことは話しづらいけど、話した後は心が楽になる。私の弟に対しても同じことが言える。

「お母さんだから？」

私の母はすごい。今度は、母の顔を見ると私が、母のことが何でも分かるように超能力者になりたい。

父

「ただいま。」

父が帰ってきた。私の父は、ふだんおそくまで仕事だから朝しか会わない。そんな父がこうやって早く帰って来た時は、なんだかうれしい。

こんなこと、父には絶対言えない。でも父が早く帰って来たら、家族みんなでたくさんおしゃべりをするこの時間が、私にとって唯一（ゆいいつ）の楽しみ。

父は、私がこんなふうに思っていること、気付いているのかな。

べつに気付いてなくたって、いい。

「今日は、父が早く帰って来たらどんな話をしようかな。」

こうして考えるのも、私の楽しみなのだから。

おやじギャグの絶えない父へ

僕の家は笑いが絶えない。なぜなら「おやじギャグの父」がいるからだ。いつも父は、隙あらば変な替え歌を歌ってみたり、ダジャレを言ってみたりと急におやじギャグを言い出す。僕はこんな人が僕の父で本当に良かったと思う。なぜなら、いつでも家を笑いで包んでくれるからだ。仕事で疲れているときもあるはず。それなのに、おやじギャグで場を和ませ、一家を幸せにしてくれる。

僕はそんな父を誇りに思う。

母の作戦

母はいつも私に「勉強しなさい。」とは言わずに「よく頑張っているね。」と言う。

正直、私はあまり勉強してなかったので最初は「誉められてラッキー」くらいにしか思ってなかったけれど、言われ続けるうちになんだか心苦しくなってきて、思わず勉強するようになった。

これが母の作戦なのか、はたまた終わらない宿題をやっている姿を見て、努力していると勘違いして普通に誉めただけなのかは分からないけれど、どちらにせよ、たった一言で私に「勉強しなきゃ」と思わせる母にはいつも完敗だ。

やっぱり母は凄いと思う。

強い母

ぼくの母は強い。どんなに家がきたなくなっても母は片づける。洗たく物がいっぱいあっても母は干す。洗い物の山が出来たとしても母は洗う。

ぼくはそんな母を見て自分も何度も挑戦する。下手くそでも失敗しても何度だってする。いつか母に頼られるように、そしてぼくの出番が来た。ぼくは、休校中に自分の出来るかぎりの家事をした。どんなによごれてもぼくは絶対にあきらめない。汚れてイライラすることもあったけれど「母もいつもがんばっている」と思いながらがんばった。そんな日々が進むにつれて「ありがとう」と何度も言われるようになりとても自信が芽ばえた。

いつもがんばっている母をとても誇りに思う。

いつも一日中がんばってつらい母に「いつもありがとう」と言えるように。

母と二人

私の好きな時間は、みんなが寝てから始まる母と二人のおしゃべりタイム。母は家族の話をすることが多い。たまにものすごく長かったり、ものすごく重かったりするけれど、時間を忘れて語っていられて、私もありのままでいることができる。母の話を聞くたびに私はこの家に生まれてこられてよかったなと思う。

母と二人きりになれるこの時間。

母の想いを知ることができるこの時間。

今日もまたたくさんお話しようね！

「思いを重ねる」言の葉

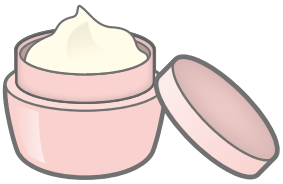
―親から子へ―

あかぎれの薬

寒い寒い一月の私の誕生日の日。

お買い物を一人でしたことがない小学生のあなたは貯金箱から五百円玉を握りしめ、あかぎれの薬を買いにお店へ。店員さんに五百円では足りないと聞くと、長い長い坂を登り貯金箱からもう一枚の五百円玉を持ちお店へ。

「はい、プレゼント。」私に渡した時の自信に満ちた力強い瞳と優しい笑顔。何年も経った今も使い切ることのできないあかぎれの薬。一生の宝物です。



息子へ

親への感謝など今は考えなくて良い。君にしてやっているのは、親の義務だ。君が産まれた瞬間から私が背負うと決めたことだ。

いつか君に子供ができた時に、この言葉の意味が分かるだろう。

君を育てる喜びを与えてくれたことに感謝しているよ。

言葉の力

人を幸せにする言葉
人を不幸にする言葉
言葉の持つ力の偉大さを感じ
言葉の持つ脅威を自覚し
言葉を大切にする
そんな娘に育ってほしい

家族の誇り

おじいちゃんのリハビリに、毎月、片道十キロメートル以上の道のりを自転車で通い付き添いをしてくれてありがとう。おばあちゃんも、お母さんも感謝しかありません。おじいちゃんも、まず君の名前を呼び、生き甲斐になっているみたいです。そんな、心優しい君は、家族の誇りです。

たまの送迎

平日に休みがあると、明日送ってと息子が言う。こいつと思いながら、次の日、車で送る。車の中では寝ている。着いたぞと起こす。無言で降りていく。

こいつと思いながら、車をUターン。車を降りて信号待ち。周りに人がいても、俺に向かって手を振っている。

こいつと思いながら、

なんかうれしい。

一緒に寝よっか

「お姉ちゃんだから。」って、
自然と甘えることをガマンしてたあなた。
おやつの時はいつも、先に妹や弟に選ばせてくれる。
毎日隣で読んであげた本も、
今は何だって一人で読めるようになった。
私にとってはもう相棒のような頼れる存在でもある。
時におっちょこちょいなところは、
今も変わらない愛おしさ。
思いやりの心、いつもありがとう。
今夜は隣で寝よう。
何か本でも読む？

心の風鈴

あなたの風鈴は、とても心地いい
私の人生にあなたの存在、心からありがとう
今年は、春先から思うようなことがなかなか叶わない
我慢の春、我慢の夏……いったいいつまで
続くのだろう
それでも、心に心地よい風が吹き、あなた
の風鈴が
「お母さん、あのね……」と聞こえてくる
私も風鈴の風にのせてあなたの音色に応える
この癒やしが、最高の幸せ
やりたいことがある前向きな心の風鈴
いつまでも、いつまでも……

優しい雨音

ザーザーと雨の音？で目が覚めた。
ふと見るとキッチンでお皿を洗う娘の姿。
「お母さん気持ちよさそうに寝てたから。」
うたた寝していた私にそんな優しい言葉を
かけてくれるようになったのね。
私の目から大雨が降りそうな梅雨の夜。
疲れが一気に吹き飛んだよ。
ありがとう。

似た者どうし

父と娘は家族の中で一番相性が合わない間柄なのかなと思うときがあります。

父親として目につくことは注意します。改善してもらいたく、こちらの言い分ばかり押しつけてしまい、あなたの主張に耳を傾けないことが気に入らず、喧嘩ばかりですね。でも、唯一、テレビのお笑いに意気投合するのが共通点で、この時ばかりは二人で笑いあっていますね。

これからも学校生活や受験のことで親子共に悩み、衝突することもあるでしょう。笑いの要素を取り入れ、お互いの主張を聞き入れられる親子関係を築いていきたいです。

親の心、子知らず

「父さんは、お前のために言っているんだ。」

子供の頃によく言われた言葉は、中学生の子を持つ親になっても言われる言葉。

子供の頃にはその言葉のありがたさが分からなかったけれど、自分が大人になっていくにつれて、あの頃の親の気持ちが分かるようになり、今頃ありがたみを感じる。

「子の幸せを願わない親はいない。」

本当は、毎日を健康で明るくすごしてくれるだけで十分なのに、親の悩みはぜいたくかな。いつもごめんな。

いるだけで、いいんだよ。

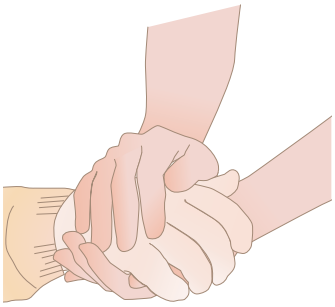
あなたが産まれ、次男、三男と家族が増え、汗だくで、泣いて、笑って、必死で育ててきました。

ある時私は病に倒れ、療養することに。

先が見えず、あせっていた。そんなときに、あなたは言った。

「いるだけで、いいんだよ。ボクたちはお母さんがいるだけで、いいの。」

幼い頃からずっと守ってきた君に、守られていた。



頑張り屋さんのあなたへ

学校に行きたくない……。

昨年まで学校が大好きだったあなたが初めてそう漏らしたとき、耳を疑いました。

あれから半年。自分でもどうして行きたくないのか分からないというあなた。今でも毎日のように「休みたい。」と言いながら、なんとか休まず学校に行けていますね。私たち親は見守ることしかできないけれど、あなたがとても頑張っていること、ちゃんと見ています。今でもお友達や先生の前では、きっと頑張って笑顔をつくっているのでしょうね。しんどそうな表情を見るのは私たちもつらいです。とはいえ、その努力はあなたを強くすると信じています。

でもね、どうしてもしんどいときは休んでもいいし、頑張る方向を変えたっていいんだよ。周りのペースに焦らなくても大丈夫。しっかり充電して、また一緒に進もう。あなたは私たちの宝物。どんな時も、あなたを応援しているよ。

令和２年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧

応募総数　15,403 点（中学生 13,451 点　親 1,952 点）

賞	中学生の部
大　賞	伊藤　優夏
準大賞	重信　龍平
準大賞	久見木　優花
優秀賞	福元　春香
優秀賞	谷川　睦月
優秀賞	竹ノ内　いち花
優秀賞	上村　曖斗
優秀賞	町田　結日那
優秀賞	松本　来路
優秀賞	高吉　啓太
入　選	牧　優佳
入　選	今村　和奏
入　選	山下　栞那
入　選	笹沢　奏斗
入　選	八木　心美
入　選	中原　大賀
入　選	山田　恭輔
入　選	川路　千尋
入　選	神脇　真心
入　選	内山　知咲
入　選	篠原　彩乃
入　選	玉井　優花

賞	親の部
大　賞	中村　まゆみ
準大賞	園田　好一郎
準大賞	小森　誠喜
優秀賞	園田　好一郎
優秀賞	久保　直子
優秀賞	城光寺　由美子
優秀賞	牧　純一郎
優秀賞	松本　美津代
優秀賞	下坂元　紫乃
優秀賞	田嶋　友子
入　選	坂口　千佳
入　選	増森　太郎
入　選	青木　賢
入　選	吉崎　めぐみ
入　選	多田　由紀子
入　選	松元　伸太郎
入　選	森元　万里子
入　選	森山　順子
入　選	宮路　錦
入　選	本　玲子
入　選	川畑　太吾
入　選	匿名　希望

団体特別賞	桜島中学校

令和２年度「こころの言の葉」コンクール　表彰式

～令和２年 11 月 21 日（土）　川商ホール　第２ホール～

教育長から受賞者の皆さんへ

受賞者インタビュー

審査委員講評

審査委員講評

審査委員長　原田　義則　先生

現代は何をするにも「理由」が必要とされる時代です。高度情報化社会・グローバル化社会の中では、データを分析し相手に説明する「論理的思考力」が必要とされます。

しかし、いくら社会の姿が変わっても、「感じる力」「想像する力」の大切さは変わりません。私たち人間は、「理由」など無くても、ＰＣなどが無くても、正しいもの・美しいもの・善いものを感じられます。他人の気持ちを想う大切さを知っているのです。

親と子の関係も、同じなのかも知れません。「ありがとう」「ごめんなさい」「大好き」を言うのに、理由は必要ありません。素直に伝えればいいのです。

でも、不思議です。この時期はお互いに、「思春期だから言いにくい」「毎日、顔を合わせているから言いづらい」「欧米文化とは違って、日本人は言いにくい」……という理由が先に立ち、ほんとうの言葉を口にできません。

この冊子には四十四人のほんとうの言葉が綴（つづ）られています。子から親へは「ありがとう」「大好きだよ」という言葉が、親から子へは「応援している」「成長の喜び」が並びます。

思春期の親子は距離があるように見えても、ほんとうは心の奥底でつながっている。むかし、キツネが星の王子さまに教えてくれた秘密　―「ものごとはね、心で見なくてはよく見えない」―を思い出します。

今回、私は初めて審査にあたったのですが、作品を読みながら思わず、くすっとしたり、はっとしたり、涙したり……感動のあまり何度も審査を中断せざるを得ませんでした。同時に、ぜひ多くの皆様に本冊子を手に取っていただきたいと思いました。親子で読み合わせをすることで、作品中の言葉をきっかけとした親子の会話が生まれ、ほんとうの言葉が紡（つむ）ぎ出されることを御期待します。善は急げ、私も早速大学の講義で取り組み、受講生の感想を聞いてみたいと思います。

さて、本コンクールは、関係者の皆様のお支えにより、今回で十八回目を迎えます。今年は、新型コロナウイルス感染症予防対策の一環として、学校再開日が延期されたこともあり、応募作品の減数も心配されたところです。しかし、例年と変わりない数の作品が寄せられました。本市の教育振興において、「こころの言の葉」コンクールが、皆様からいかに支持されているかが分かります。御応募いただきました皆様、そして本冊子を手に取っていただきました皆様に、お礼を申し上げつつ、今後も、本事業がますます発展することを祈念しております。

鹿児島大学教育学部　国語教育講座　准教授

西　ゆう子　先生

コロナ下、マスク着用、リモートワーク、学校の休業、活動の制限……等で私たちの暮らしは大きく変わりました。こんな中、作品を読ませてもらって、こんなときだからこそ、家族で絆を更に深めようとされていることが伝わってきて、大変嬉しく思いました。

心に残った「言の葉」を二つ紹介します。

一つは、「母の家事（洗濯・片付け）をやり遂げる心の強さを誇りに思い、休業中に家事に挑戦し自信を持ったという『言の葉』」です。母と息子の絆、日常の「家事」のとらえ方、休業中に生きる力を身につけたたくましさに読み手の私も励まされました。

二つめは、「お母さんは同じことを何回も聞いてくるおばあちゃんにイラついている。でもおばあちゃんにいつも優しく笑顔で接する息子にジーンときたという母親の『言の葉』」です。幼い頃からの孫と祖母、そして母との三世代の絆ですね。今、両親を介護中の私もおおいに学びました。高齢化社会の今そして未来に、希望の光を感じます。

また、他の作品の「我が家」流絆づくり（散歩、貼り紙、電話、バイク、弁当、部活、挨拶等）の一つ一つが私の心に温かな灯をともしてくれました。

日頃面と向かっては言えない思いを書いて、応募してくださった皆様に感謝します。この作品集が多くの方に届き、心に灯をともしてくれますようにと祈っています。

元市教育委員会スクールカウンセラー

遠藤　陽子　先生

こころの言の葉の審査にあたり、今年は例年とは違う感覚で臨むこととなりました。

コロナ禍で通常授業がままならない子どもたち。仕事の仕方や立場が大きく変わった大人たち。先の見えない不安に親も子も翻弄され、やり場のない思いの中でこの心の言の葉に取り組んだ方もいらっしゃったでしょう。

日本中に蔓延する憂いの中で親子の関わりはどうなるのかと危惧しましたが、集まった作品は例年と変わらぬ親子の想いが綴られていました。そして、困難な状況だからこそお互いを思いやり、いつも近くにいることのありがたさを実感できる文面が多く見受けられたように思います。

残念ながら、今年は例年に比べ児童虐待の報告件数が多いと耳にします。家庭によっては愛情を表現しにくい環境になってしまったことに心を痛めてしまいますが、その一方で青春の一ページを奪われてしまった子どもたちが必死に前を向こうとする姿を見て、子の成長を感じ、それが親の在り方にも影響しているような作品も多くありました。

当たり前が当たり前でなくなったからこそ実感できる日々の幸せを皆様から頂いた一遍一遍に感じ、審査をしながら私自身多くの気付きと刺激を受けることが出来ました。

日頃言葉にしにくい親子の本音。今後もこのこころの言の葉を通して、お互いの結びつきを実感できる機会にしていただけたらと思います。

フリーアナウンサー

隈元　浩二郎　先生

令和二年度は新型コロナウイルスにゆさぶられてスタートしましたが、そのことが応募作品の中にも、いくつか描かれていました。誰もが体験したことのない驚きや不安に揺れました。でも、それらの思いを親子で共有することで、支え合い、思いやるやさしさが、言の葉の随所に光りました。

ただ例年の作品と異なった点は、おそらくリモートなどによる在宅勤務や自宅待機などのせいでしょうか。いつもより違った時間帯の中で、共に過ごすことで、相手のあらや改善点などが目に付いたのかもしれません。まず互いの日々の中で気付いた改めるべき点などを指摘し、こうしたらと提案するといった書きぶりが見受けられました。でもさすがは親子です。注文のすぐ後には、その改善点を大きく超えたところの相手の素晴らしさや偉大さを綴った表現が押し寄せてくるのです。幾重にも、幾重にも。私は改めて、「親子とはすごいな」と再認識させられました。どんな大変なことが起ころうとも、相手のことを第一に考え、大切に思い、次の瞬間にすべてを許し、何事もなかったかのように慈しみ合える、言の葉の一つ一つに、互いを思いやるやさしさが繋がっていると感じました。

コロナ禍の影響はまだまだ続きますが、今年度の作品は親子や家族という存在の素晴らしさを再認識させてくれる作品集ですので、このようなときだからこそ、この作品集を親子や家族が一緒になって読まれ、感想を共有していただければ幸いです

元中学校校長

南　香織　先生

はじめに、第十八回「こころの言の葉」コンクール審査にあたり、ご応募いただいた全ての方に感謝申し上げます。

何気ない日常の一コマの中で、親、子がそれぞれに思うこと、言葉では、なかなか伝えられない思いが書かれておりました。

今、世界中で流行している新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、制限のある生活環境の中で生まれる不安やストレスは、先の見えない初めてのことに様々な影響をあたえております。そんな中でも、いつもと変わらない、お互いを思う気持ちが作品の中にたくさん溢れておりました。

親という立場から、子どもの立場から、特別ではない、あたりまえの日常の中で生まれるメッセージにあらためて、一瞬一瞬がかけがいのない時なのだということを感じました。

今回の作品も、大人が思っているよりも、子どもはしっかりとした考えを持ち、悩みながらもたくましく生きる姿や親もまた精一杯に子どもに寄り添う姿が作品にみえておりました。

審査にあたる中、作品の情景が目に浮かび目頭が熱くなり、心が温かくなる時間をいただきました。

日々の生活の中の限られた時間の中で、子どもたちと親が「確かな絆」を育んでいるそう実感できる作品でした。

「こころの言の葉」作品集をご覧になられる子育て世代の皆さまが、ふっと肩の力をぬき、ご自身の子育ての活力になるような作品集だと思っております。作品をご覧になり、子どもさんと語る時間をおもちになられてみてはいかがでしょうか。

「今しかできない子育てを」共に学び・悩みながら、同世代の子どもをもつ親として、子育てを一緒に楽しみましょう。

市ＰＴＡ連合会会長

編集後記

関係の皆様の御尽力により、「こころの言の葉」コンクール作品集第十八集が完成しました。一万五千点を超える応募数は、各中学校での取組の成果であると感謝申し上げます。親の部の応募も千点を超えております。これは、所期の目的である「中学生とその親の心の交流」を果たす意味でも、大きな成果であります。

今年、新型コロナウイルス感染症の拡大防止に向け、「新しい生活様式」が示されました。人との接触を控え、孤独を感じてしまいやすいこんな時代だからこそ、人と人がつながり合い、お互いを尊重して生きていくことが、いよいよ大切になってきます。

それは家族にとっても同じです。

子供はもちろん、母親も、父親も、お互いへの思いを伝えることは、やはり難しいものです。いつもうまく表現できない思いを、言の葉に込めて応募してくださった大勢の皆様に、心から感謝いたします。

本年度の団体特別賞は、桜島中学校が受賞しました。積極的な応募を評価されての受賞です。それぞれの学校での取組が、このコンクールを支えてくださっています。

これからも、様々な場面で、ますます親子の心の交流が図られることを願っています。

あなたとわくわく

マグマシティ
鹿児島市

こころの言の葉

～第１８集　私の大切な人たちへ、私の言葉で伝えたい～

令和３年１月３１日

発行　鹿児島市教育委員会
〒892－0816　鹿児島市山下町 6−1
TEL（099）227－1941　FAX（099）227－3016

リサイクル適性の表示：紙へリサイクル可